

2017年(平成29年)

第119号

(11月1日)

平安月報

The HEIAN monthly report

発行所：立正佼成会 京都教会
 発行責任者：渉外部長 田中規之
 編集委員長：渉外広報 植田恭司
 〒605-0041 京都市東山区三条東町 230
 TEL (075)762-2211 FAX (075)762-2266

第14回奈良県宗教者フォーラム ～宗教者、市民が集う～

9月30日、奈良県橿原市の橿原神宮において「第14回奈良県宗教者フォーラム」(実行委主催)が開催され、県内外の宗教者、市民、立正佼成会奈良教会会員ら約350人が集まり、京都教会からも渉外部スタッフを中心に4名が参加しました。

はじめに拝殿において「平和祈願祭」が行われ、参加者は平和の祈りを捧げました。その後「神宮会館」に場所を移し、『日本のところと宗教の役割 一神話から歴史へ』をテーマに講演がありました。

石上神宮禰宜の、森好央実行委員長による開式の辞に続き、久保田昌孝橿原神宮宮司の挨拶では、「橿原神宮は神武天皇(第1代天皇)をお祀りしていることから、世界が戦争へ向かうのではないかという現在において、奈良の地から平和を発信したい」と、世界平和を祈念されました。

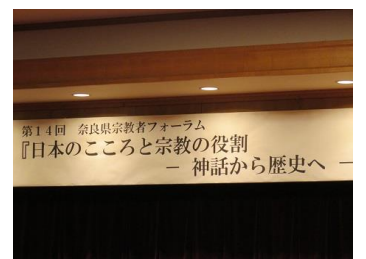


第1部は『勾玉(まがたま)と神話』と題し、菅谷文則奈良県立橿原考古学研究所所長が講演に立ちました。考古学の立場から「三種の神器」の一つである勾玉に着目して、古墳群の出土品から研究を進めてきた経緯を語り、桜井市の芝遺跡から出土した子持勾玉や



韓国南部のひすい製の勾玉などをスライドで紹介。勾玉の形状や用途にまつわる学説のほか、日本書紀や古事記の記述などを基に解説されました。

第2部は『人が神になる方法 一信長・秀吉・家康の自己神格化計画』と題し、歴史研究家の井沢元彦氏が講演を行いました。国内外の権力者を比較して「海外では誰でも皇帝や国王になれるが、日本では天皇との血筋が必要」と指摘するとともに、日本の天皇制が今日まで続いてきた経緯を説明。自己神格化を目指そうとした織田信長と、没後、天皇から東照大権現の神号をもらい、日光東照宮に祀(まつ)られた徳川家康を対比して、持論を述べられました。



は「男心と秋の空」です。ちなみに、冒頭の話の元。世の中の動向に目を見張。そつならないように、常に。れる性格だと言われます。は喉元過ぎれば熱さを忘。を示しています▼日本人。関心を持つ人が多いこと。投票されたことは、政治に。録しました。しかし、悪条。右されてか、京都府は5。の投票日でした。天候に左。英断に敬意を表したいと。観覧者の安全を図っての。たことでしょうか。参列者や。定をされたことは、関係者。間をかけた準備を進めて。こられただけに、中止の決。十八年に祭が始まって初。に中止されたのは、明治二。止されました。天候を理由。に予定されていた、京都三。大祭のひとつ、時代祭が中。中止されました。二十二日。れ、予定していた諸行事が。に週末に暴風雨に見舞わ。れるように、今年の秋、特。 「女心と秋の空」といわ。

時事刻々

今月のことば ～「親孝行と菩薩行」～

洛叡支部青年部 長澤克拡

11月、洛叡支部学生部の長澤克拡が担当させて頂きます。よろしくお願い致します。

今月の会長先生のご法話は『親孝行と菩薩行』ということで、私はいくつか感じるがありました。

まず、『親孝行に「手遅れ」なし』という所ですが、私は親孝行といっても大なり小なり様々なことがあり、一概にこれが親孝行であるという正解が存在しないように感じました。

一人ひとりが考える親孝行の度合いは変わってくると思います。両親より長生きをすると親孝行、両親よりも先に亡くなれば親不孝であると考えてしまいがちですが、私は決してそのようなことはないと思いました。

それよりも、自分自身が生きていく間にどれだけの親孝行ができていたのかが重要だと感じました。今の両親のもとに生まれてきて本当に良かったと思っていますし、人間としてこの世に生まれてきたこと、尚且つ日本というとても平和な国に生まれてきたことが奇跡だと感じています。

そしてそれは、ご先祖様がいないければ今の自分も存在していない。それを思うと、今まであまり考えずにしていたご供養や仏壇に手を合わせる事、お墓参りをすることは非常に大切なことであると気づきました。

次に、『孝は百行の本』という所で、「親孝行も先祖供養も菩薩行も、すべてに共通するのはいま命あることへの『感謝』」というところが心にとまりました。

私は、大学生になるまでに様々なことがありました。当初は国公立の大学に進む予定でしたが、センター試験で失敗をして、国公立大学志望から私立大学志望へと路線を変更しました。しかし、私立大学の前期試験、中期試験を受験しましたがどちらも残念な結果

に終わりました。このままでは後悔してしまうと思い、さらに勉強を重ね、後期試験に臨んだ結果、無事に現在通っている大学に合格することができました。

合格した時は安堵した気持ちと、これから頑張るぞという強い意気込みがあったことを今でも覚えています。あれから4年が経ち、今年は就職活動の年でした。

今年は売り手市場と言われ、完全に学生が優位な立場で就職活動を進めることができる年でしたが、誰もが一番働きたい所への就職を希望してしまうため、倍率が高く不合格になりがちです。でも、私は有難いことに、第一志望の会社に就職が決まりました。

いま思えば、小学校・中学校も義務教育とはいえ、いつも温かく支えてくれて、いちばん私を応援してくれていたのは両親であることに、改めて気づかせて頂きました。両親が塾の高い費用を出して頂いたお陰まで大学にも入ることが出来、そのお陰で私のなりたかった職業に就くことが出来たのです。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

そして、今ある命も両親やご先祖さまのお陰さまで、就職活動中に関わって頂いたすべての方々にも、感謝の気持ちを忘れてはいけないと思っています。

来年からは社会人として仕事をしていきます。『孝は百行の本』という言葉を胸に、元気な姿で仕事をしていきたいと思っています。

両親、ご先祖さまに頂いたこの命を、輝かせていく為に精一杯頑張っていくと共に、一日一日を大切に健康で過ごしていきたいと思っています。

また、11月23日は私の22歳の誕生日です。勤労感謝の日ではありますが、お祝いされつつも、両親には、日々仕事や家事をして頂いていることに、より一層の感謝の気持ちを伝えさせて頂きたいと、思っています。 合掌

近畿支教区 青年の集い「萌芽」

～ユニセフ募金目標達成に歓喜～

10月29日、大阪普門館において「平成29年度 近畿支教区青年の集い～萌芽～」が行われ、法座席いっぱいの青年が集結し、京都教会からも28名の参加がありました。

「笑顔あふれる平和な世界を目指し、信仰の芽を発見する」を目的に、近畿支教区でユニセフ募金額1000万円、一食を捧げる運動募金額2割増を目指して各教会で取り組んできました。

開会式で実行委員長から目標達成の報告が発表されると会場からは大きな拍手が沸き起こりました。

その後、中村常務理事が登壇し、「信仰の芽を発見する」をテーマに講話がありました。「信仰の目標は感謝の気持ちを持つことだが、それは『ありがとう』と言



えることだけではなく、日頃の当たり前にどれだけ気付けるかです」と述べられました。

また本気で真心を込めて取り組むことの大切さを述べ、佼成会は30人足らずで創立した歴史を紹介。開祖さまに倣ってここに集結している青年一人ひとりが本気になることで、仏さまから応援して頂ける自分たちになりましようかと促されました。

京都教会が分別・リサイクル活動優良事業所に ～会員の協力も必要～

10月3日、京都市職員会館「かもがわ」において、平成29年度2R及び分別・リサイクル活動優良事業所及び2R特別優良事業所認定授与式があり、京都教会を代表して蝦原管理主任が出席しました。

2Rとは京都市がごみ半減をめざす「しまつのこころ条例」の趣旨を踏まえ、独自性がある、先進的であるなど特に優れたリデュース（発生抑制）、リユース（再使用）の取組を行う事業所を「2R 特別優良事業所」として認定する制度のことで、京都教会ではゴミ箱の分別表示に文字だけではなく色でも分かるように工夫（燃えるゴミ：赤、雑紙：緑、プラ：白黒）するなど

の取り組みが評価され、認定証が授与されました。認定期間は平成29年10月1日～平成31年9月30日まで。あと2期連続で実地審査に合格すれば、永久認定証が授与されます。



『因果はめぐる 一今、私たちは』

～北朝鮮情勢に対する見解～

76年前、他国に侵攻する日本に対し、アメリカを中心とする国際社会は厳しい経済制裁を実施しました。しかし、それが招いたのは、真珠湾への日本の先制攻撃でした。現在の北朝鮮を取り巻く状況は当時と似ており、あの「戦前」と同じ道筋を辿っているのではないかと、そう思えてなりません。

去る9月20日の国連総会の席上、安倍首相は、「対話による問題解決の試みは、一再ならず、無に帰した」「必要なのは、対話ではない。圧力なのです」と述べました。前日には、トランプ米大統領が「アメリカと同盟国を守らざるをえない場合、北朝鮮を完全に壊滅するほか選択肢はなくなる」と語りました。

因果はめぐる 日本は今、アメリカと共に国際社会の先頭に立ち、経済封鎖や石油禁輸などの圧力によって北朝鮮を封じ込めようとしています。しかし、圧力を強めることが、危険であることは明らかです。実際、米朝間で挑発合戦がエスカレートしており、戦前の日本と同じ結果を招く危険性が增大することは容易に想像できます。

悲惨な戦争を体験し、そうした危険性を、どの国よりも理解しているはずの日本が、なぜ北朝鮮を追い詰めるのでしょうか。それが本当に日本の取るべき態度なのか、立ち止まって、考えなければなりません。

庭野日敬開祖は、1978（昭和53）年の第一回国連軍縮特別総会で、当時の米ソ両首脳に対し、「危険をおかしてまで武装するよりも、むしろ平和のために危険をおかすべきである」と訴えました。開祖がその半生を宗教対話・協力による世界平和の実現に捧げたのは、仏教徒として不殺生戒を守るため、法華経に説かれる理想の実現のためです。しかし、果たしてそれだけでしょうか。

開祖はこう述べています。「わたしが現在、世界平和のために一身をなげうって働いているその理念の原点は、もちろん仏教に教えられた不殺生戒であります

けれども、やむにやまれぬ行動としてわたしを駆り立てる感情の原点は、あの日々に体験した『もう戦争はごめんだ』という痛切な思いです。そして、終戦の日にした何ともいえない寂静の境地であります」（『倭成』昭和54年8月号）。

私たちは今また、「戦前」を生きているのでしょうか。日本は再び、「あの日々」を繰り返すのでしょうか。もう事態を変えることはできないのでしょうか。

因果をこえる こうした現状を招いてしまった要因は、政治指導者だけでなく、私たち自身にもあり、同じことを繰り返さない努力が必要です。たとえ起こりつつあることが似通っていても、どのような心で、どのように行動するかによって結果は異なる、ということを私たちは体験してきました。歴史とその教訓に学んで因果を断ち切り、世界を異なる果報へと導く責任は私たちにあるのです。

真の対話には、世界を変える力があります。駆け引きや圧力ではなく、まずは自らが勇気を持って向き合い、相手の不安や恐怖心を和らげて関係を築いていく対話がいかに有効かを、私たちは知っています。争いを回避し共存する道を、時間をかけて探っていくこそが、日本の安全、ひいては世界の安定につながります。私たちは今、歴史的に重要な時を生きています。対話による平和の文化を築くのか、力による対立の時代を迎えるのか。

今、まさに衆議院が解散され、日本の進路は、有権者一人ひとりの選択にかかっています。国の体制が違って、北朝鮮に、世界中に、私たちと同じように家族の幸せを願い、一日一日をつつましく生きている人たちがいます。今こそ戦争のない世界のために、心からの平和への祈りを捧げましょう。そしてすべてのいのちの幸せのために、祈りと対話の輪を広げ、共に行動していきましょう。

平成29年10月1日 立正佼成会

宗教から見た平和『現代世界と平和』～庭野開祖の法話より～

北朝鮮の核兵器の開発や長距離ミサイルの発射は許されるものではありません。それに対する米国を中心に国際社会は力によって抑え込もうとしています。日本の安倍首相は全面的に米トランプ大統領を支持しています。こんな中、国民の中には近隣諸国に対抗するために軍事力を強化すべきだと考えている人も少なくありません。もし庭野開祖が今の状況をご覧になれば、どのように述べられるか、残された法話から考えてみることにします。
(編集部)

◇平和で安心できる社会に

宗教の目的は、世界を平和に導き、いかなる人達も真に幸せになり、安心して生活のできる社会をつくることにあります。

平和は、手をこまねいて待つものではなく、だれかがつくらねばなりません。平和とは、単なる抽象的観念ではないのです。われわれの多くは、相手が悔い改めることによって平和をつくろうとしたがりますが、平和の要諦は、「まず自分から変わる」ことです。この世界に、そして、どんな家庭にも平和こそ必要なのです。家庭が平和であるとき、社会に影響力を持ちます。国全体が平和であるときにこそ初めて、その国は世界に平和をもたらすことができるのです。

世界は、政治、文化、その他の一切のものが、相互理解と寛容の精神を基調に変わりつつあります。むしろ、変わるといふより、目覚めつつあると言った方が当を得ているとも言えましょう。このような時代にあつて、宗教活動も、人間性を尊重した相互理解への動向を示しています。

◇平和への礎（いしずえ）をつくる

昔から人間は、永い苦しい戦争が終結した直後に、最も真剣に平和を希求し、平和に向かっての行動を起こしたようです。

第一次世界大戦が終わるとすぐに、『国際連盟』が出来たのも、第二次大戦が終結して間もなく、『国際連合』の組織づくりが始まったのも、人類として、き

わめて自然な目覚めであり、当然の行動であったと言えます。

しかし、『国際連盟』はアメリカ大統領ウィルソンの提唱によるものだったにもかかわらず、肝心のアメリカ力が最初から加入せず、我が国も満州問題に対する勧告を不満として脱退し、ドイツもイタリアもそれにならい、そのあと国際連盟に加入したソ連も、フィンランドに侵入した際に除名され、ついに、有名無実の存在となってしまいました。

『国際連合』は、現在いろいろな活動を活発に行っていますが、まだまだ非力の難は免れ得ず、起こりそうな戦争を阻止したり、起こった戦争を中止させるほどの実力を持つまでには至っていません。

なぜ、そうした力を持ち得ないか。一言でいえば、組織は出来たけれども、組織の一々のメンバーに肝心の精神が貫き通っていないからです。

加盟各国の国家エゴが、相変わらず増長の一途をたどっているからです。もう一歩奥に踏み込んで考えれば、人類のひとりびとりが平和への回心（えしん）を遂げていないからです。

こう考えてきますと、平和というものは煎じ詰めれば、人間ひとりびとりの心の問題であり、したがって、我が田に水を引くわけでは決してありませんが、人間の回心に最も大きな力を持つ宗教こそが、平和への真の礎を造るものだということを、あらためて、再認識せざるを得ないのであります。

(つづく)

11～12月の主な教会行事

11月1日(水)	9:00～	朔日参り
4日(土)	9:00～	開祖さまご命日
10日(金)	9:00～	脇祖さまご命日
12日(日)	9:00～	七五三式典
15日(水)	9:00～	開祖さま生誕会
12月1日(金)	9:00～	朔日参り
4日(月)	9:00～	開祖さまご命日
5日(火)	9:00～	教会発足58周年記念式典
8日(金)	9:00～	成道会
10日(日)	9:00～	脇祖さまご命日
13日(水)	18:00～	議員懇話会
15日(金)	9:00～	開祖さま生誕会
23日(土)	10:00～	教会大掃除

●メッセージ

衆議院選挙が行われた10月22日は超大型の台風21号が接近し、政局も荒れましたが天候も大荒れし、亡くなられた方、被害に遭われた方もおられ、お見舞い申し上げます。ところで、大きな報道はされていなかったようですが、台風21号を調べるため、名古屋大学を中心とする研究グループが日本人の研究者として初めて、飛行機で台風の中心である「目」の中に入り、直接、観測を行っていました。グループは台風の中心付近を旋回しながら観測機器を投下し、風速や気圧や湿度など、今後の予報に役立つデータを記録できたそうです。動画もYouTubeにアップされていますが、まさに命がけであり、操縦を一步間違えば死に直面する観測と思われれます。脱帽の一言につきます。